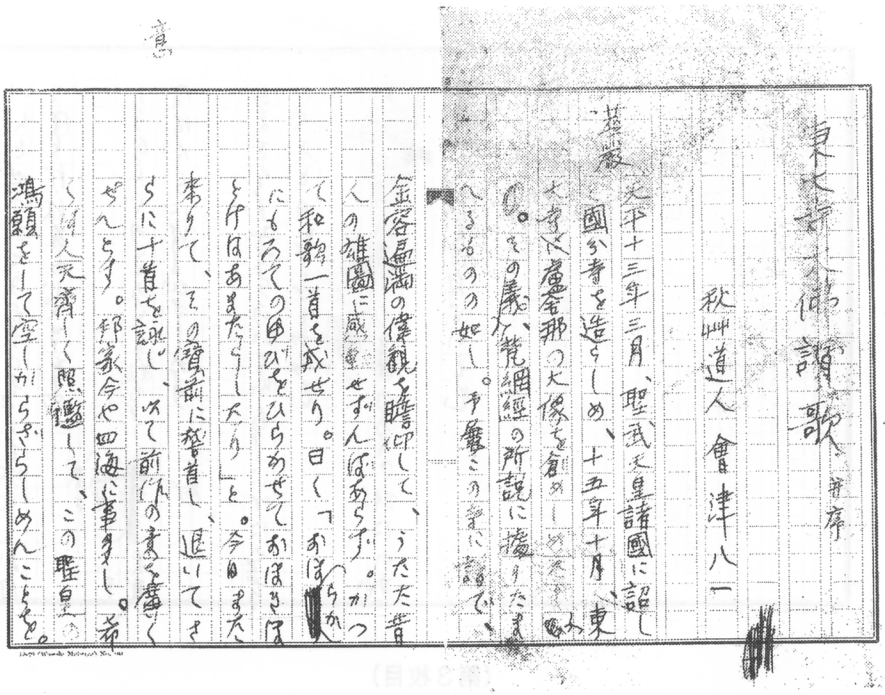
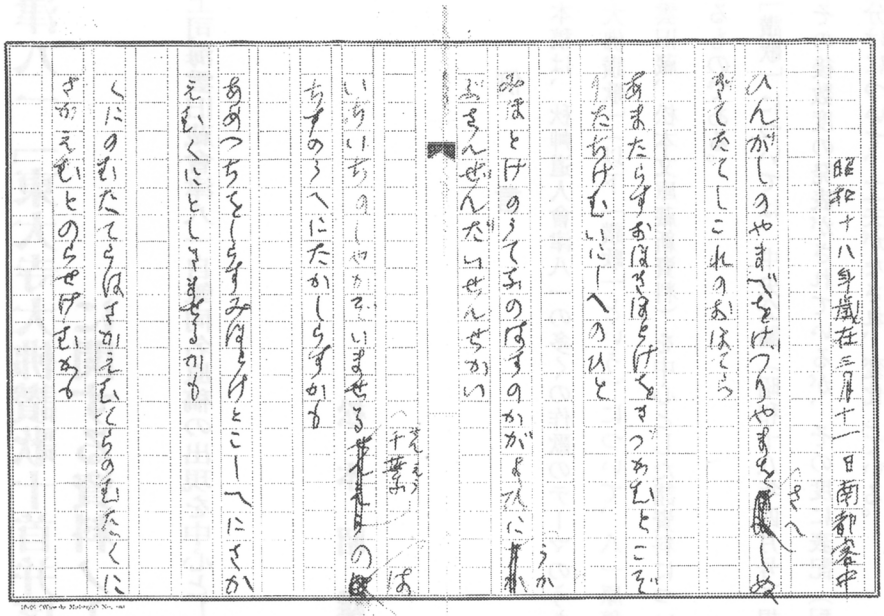


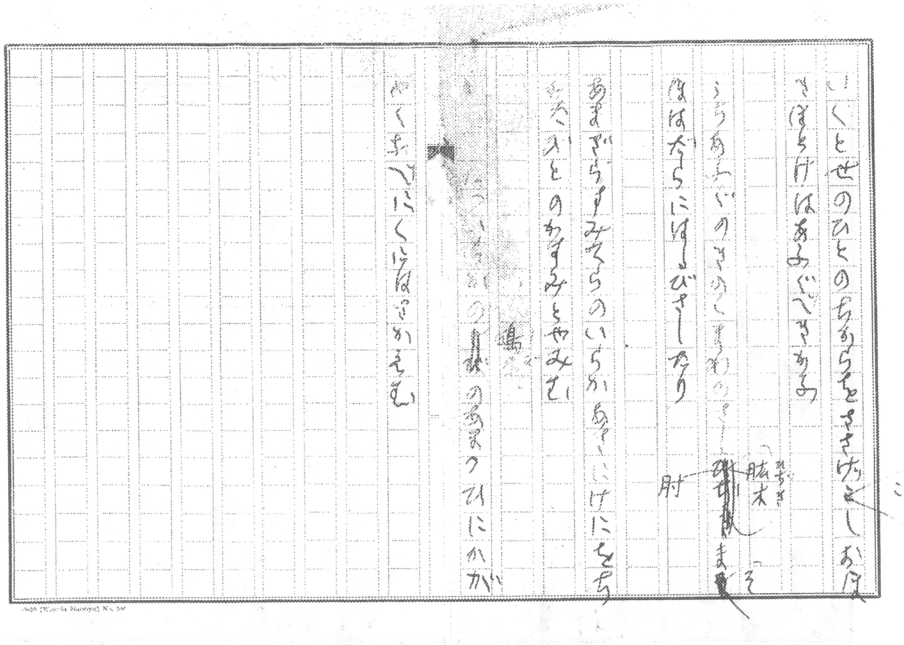
東大寺大佛讃歌 并序

秋岬道人 會津八一

會津八一自筆（ペン書）「東大寺大佛讃歌并序」（松本文庫蔵）
（400字詰原稿用紙３枚　水濡によって、シミ、カビなどの汚れやインク消え、破れの痛みがある）
（第１枚目）



（第２枚目）



（第３枚目）

《研究ノート》

會津八一「東大寺大佛讃歌十首并序」に関する資料ノート

―上司海雲旧蔵會津八一自筆同名原稿の出現を中心として―

松本昭雄

例言

一　本稿は、秋艸道人會津八一の多くの作歌のテーマのうち「東大寺大佛讃歌」（以下「讃歌」という）について、八一原稿（上司海雲旧蔵、松本文庫蔵新資料）を中心とした諸資料について記述するものである。

一　「讃歌」については、中央公論（昭和十八年四月号）掲載からその後数度の発表がされているが、その度に表記（配列）、語分けについて、工夫がなされ、変化している。

一　その変化の過程を、書簡、原稿、出版誌などの資料を中心と

してたどることを企図のひとつとした。

一　八一は、若くして句作に親しみ、のち短歌に移り三十一文字の短歌という詩型において、声調（はじめは音調と言った…筆者）を最重視した。

一　制作、発表にあたっては、さまざま、ありとあらゆる素材を駆使し、多くの媒体を通じて行ったが、つねにそれぞれの時、場合において最もふさわしいと考えるものを選び、その究極の妙を求めて工夫し盡した。

こんにち残された八一の断簡零墨にいたるまで、讃嘆渇望するところとなっている所以である。

例えば、一首の表記について

配列の場合、「一行組」、「二行組（第一行上句第二行下句、第一行三十字余行余字）」、「五行組」を、

用語において、「漢字かなまじり（漢字のルビ打ちの場合も）」、「かなのみ」などを、

語分け（八一の云う品詞切り）において、さまざまな試行を、

さらに、難字句などの解説のための「自註」を、

と実にとどまるところのないありさまを知ることができる。

そして没後なお、中央公論社（全十二巻）版會津八一全集第四巻、第五巻の編集後記（松下秀麿）に示された、

―声調をとくに重んじ、平假名表記を主張した著者（八一…筆者）は、この「語分け」において作品表記の完璧を期したのである。しかし、この表記の揺ぎない施用は一朝にして成るものでなく、今回の編集にあたっても幾多の改変を餘儀なくされたのであるが、いまだ完全と言いがたいのが実情である。後勁の補正に俟つしだいである。―

―一首の配列（表記）において―第一行に上句（五・七・五）を据え、下句（七・七）を第二行においた。―「語分け」形式にあっては、―その語・句の切り方についてはさまざまに改変をみたが、このたびは可能な限り検討を加え、ほぼ著者（八一のこと…筆者）の所期（・点筆者）した表記法に定着したかと思う。―

によっても、この一連の作業は、八一のあとにも残されている大きな課題といえるのである。

本稿の稿末において、

「讃歌十首」各歌の表記・体裁の時系変化の一項を煩をいとはず設け、「参考」としたのは、この課題の作業がいまだ完結せず残されていることへの自覚自彊の意味をも込めてのことである。

一　八一は、自身の構想の具体化にあたっては、関係する者すべてに、無理とも思われるような細かな注意を求め、理想実現の

ため精力的な働きかけを行った。本稿「讃歌」についても、また読者に訴えんとする全き意図を、いかに実現するかに腐心した一端をみることができると考える。

一　本稿の中心となった八一「讃歌」原稿をめぐる調査にあたっては、東大寺図書館ならびに同館の野村かおる氏をはじめとする方々からご指導をいただくとともに、貴重な資料である「雑華乃薗」（昭和十八年五月号）のご恵与をうけるという僥倖にも恵まれ、さらに東大寺、同本坊鈴木公成氏からその転載、引用などの御許可を賜ったことに対して心から厚くお礼申し上げたい。

また、多くの既出版からの引用、先人の業績の借論などの学恩を受けた。記して深く謝するところである。

目次

一　會津八一の奈良と東大寺……40
二　「東大寺大佛讃歌」以前の東大寺詠……42
三　吉野秀雄筆写會津八一歌稿「東大寺大佛讃歌」（昭和十八年二月）……42
四　中央公論（昭和十八年四月号）掲載「東大寺大佛讃歌十首并序」（以下五・六「讃歌」という）……47
五　新資料上司海雲旧蔵會津八一自筆（ペン書）原稿「讃歌」（松本文庫蔵）……48
六　東大寺『雑華乃薗』第二十五号（昭和十八年五月号）掲載「讃歌」……50
七　中央公論社（昭和二十六年五月）刊、會津八一全歌集中「大佛讃歌」……63
八　求龍堂（昭和四十二年五月）刊「東大寺大佛讃歌」（詠艸會津八一、添画杉本健吉）……65
九　参考「讃歌十首」各歌の表記・体裁の時系変化……66

一　會津八一の奈良と東大寺

秋艸道人會津八一が、奈良をこよなく愛したことは、つとに知られている。

われ奈良の風光と美術とを酷愛して、其間に徘徊することすでにいく度ぞ。遂に或は骨をこゝに埋めんとさへおもへり。こゝにして詠じたる歌は、吾ながらに心ゆくばかりなり。われ今これを誦すれば、青山たちまち遠く繞り、緑樹甍に迫りて、恍惚として、身はすでに舊都の中に在るが如し。（南京新唱[1]「自序」）

たびたび八一とともに奈良に遊んだ我が先師宮川寅雄は、

だいたい、奈良のなかの会津八一は機嫌がいい。奈良における八一は、その風物のなかで、從容と遊んでいる風態で、それが独得の風格をもっていた。がつがつ眼を皿のようにして見て廻るといったことには、ついぞ出会ったことがない。だから、私も自然、それが身について、いまでも、八一流に奈良を徘徊するのである。（南都の秋艸道人[2]）

と回想する。

この奈良に在るときの気分・空気は、いまもしばしば催される「會津八一展」の図録などの写真でわれわれもよく味得することができる[3]。

筆者も負けず劣らず奈良好きのひとりとして、四六時中頭のなかに奈良の四季おりおりの風物を思いうかべて心を療やしつづけ、つぎに訪ねる日を待ち望んでいるのである。

京都、大阪などを経由して電車を乗り継ぎ、奈良盆地に入るときなどは、心ははやりときめき、興奮をおさえがたい。それは自動車でのときよりもはるかに強い。そして、この地に間違いなく着きつつあることの喜びのまず第一は何といっても、東（ひんがし）の山辺に大佛殿の大屋根を目にしたときである。會津八一は、随筆「東大寺断想」（昭和二十年「文芸春秋」二月号）のなかでつぎのように述べている。勿論、筆者も八一と同様、いやそれ以上の思い入れを有するものである。

私はこれまで幾度奈良へ出かけて行つたものか、數へて見たこともないが、汽車で行つても電車で行つても、もう奈良が近くなると、私はいつもそわそわと立ち上つて、窓をあけて、三笠山のこちらに大きく盛り上がつてゐる大佛殿の屋根を眺める。おもへば奈良地方には、古くは三大寺、後には七大寺、十大寺、十五大寺、と大きな寺がいろいろあつたけれども、この寺こそは、今にしてほんとに奈良の「おほてら」の名にふさはしい。鴟尾の光る、この「おほてら」の大きな屋根を、まだ停

りもやらぬ車の窓から眺めただけで、もう奈良に着いてゐるといふ一種の歡びを、胸一ぱいに感じる。

なるほど、この地方には、法隆寺や、唐招提寺や、室生寺などのやうに、そこへ足を移せば、建物や、彫刻や、時として繪畫にいたるまで――やかましく云ふことになれば、たやすく創建のままとは云はれないにしても――割合に都合よく纏まつて遺つてゐるので、そのほの暗くもの寂びた中に、それぞれ一番古い時代の雰圍氣が、まだかなり濃く漂つてゐて、すぐ吾々をその奥へ曳き入れさうにする。けだし大和を行く古寺巡拜者にとつて、これが何よりも大きな魅力であるらしい。私などもこの魅力には一とたまりもなく降參して、隨處にうつつを抜かしたものである。けれども東大寺になるとそこのところがまるで違ふ。この寺で私どもが打たれるのは、まづその明るさ、そして、その大さと久しさである。詳しくいへば千何百年の久しさの上に亙るところのその大さである。（抜粋）

この高揚した気分が、ついにこの文の終章において、誰もが知る

一たい美術をば、至上だの永遠だのと、誰が云ひ出したことであろう。云々

の発言につながってゆくのであるが、[4]それはともかく、八一は奈良全体の時間、空間すべてを象徴する大きさをもつものとして東大寺を位置づけたのである。

註（1）一九二四（大正十三）年十二月、春陽堂刊「南京新唱」（會津八一第一歌集）

（2）一九七五（昭和五十）年六月、淡交社刊「會津八一・鹿鳴集・奈良」宮川寅雄

（3）一例を挙げれば、一九八六年、毎日新聞社主催の「大和路の詩とこころ　會津八一展」図録の写真

（イ）東大寺南大門の売店にて（昭和十八年三月）は、ソフト帽にオーバー姿の宮川寅雄と、同じくソフトにマント姿の八一が右手を前にさしだし、数頭の鹿にとかこまれている姿。

（ロ）唐招提寺金堂付近にて（昭和十八年）は、恐らく金堂裏側大扉前と思われるところで案内の小僧さんと二人並んだ八一が頭にソフト、和服で腕組み、かなたをみて悠然といかつい顔でほほえんでいるシーン。

（4）一九四五（昭和二十）年二月、文芸春秋社「文芸春秋」二月号抜粋

一たい美術をば、至上だの永遠だのと、誰が云ひ出したことであらう。さういふ御題目は、ろくろく美術の難有みを知らずに、疎末に扱つて平氣でやつて來た世上のわからず屋には、充分に教へ込まなければならなかつたのであらうが、生命は束の間なれども藝術は永遠なりなどと云つて見てもつまりは人生あつての藝術にちがひなからう。藝術は人が作るのか自然に産れて來るものか、それはどちらにしても、とにかく人間あつてのことであれば、人間とともに變遷もあり、盛

衰もあらう。そしてその背景の時代に、のつぴきならぬ關係があるものならば、時代の消耗を免かれるものではなからう。だから時代を超えた永遠性などを考へるだけ無駄なことである。

吾々としては、唯いつの果までも反撥と復活とをその將來の上に求めて行くべきである。これこそ人生に於て藝術を永遠ならしめる一つの道、恐らく唯一つの道であらう。

二「東大寺大佛讃歌」以前の東大寺詠

八一の第一歌集である「南京新唱」（大正十三年春陽堂刊）の中には、

東大寺

おほらかにもろ手のゆびをひらかせて
おほきほとけはあまたらしたり

あまた、びこのひろまへにめぐりきて
たちたるわれぞ知るやみほとけ

東大寺懐古

おほてらのほとけのかぎり灯ともして
よるのみゆきを待つぞゆゝしき

おほてらのにはの幡鉾さよふけて
ぬひのほとけに露ぞおきにける

が他の寺でらの詠とともに収められいて、「おほらかにもろ手のゆびを…」の一首はのちに、東大寺歌碑として大佛殿中門前参道西側に建てられた。

三　吉野秀雄筆写會津八一歌稿「東大寺大佛讃歌」

「会津八一・吉野秀雄　往復書簡上・下」（二玄社刊　猪狩章・岡村浩・近藤悠子編）より（以下「八一・秀雄往復書簡」という）

東大寺大佛讃歌　　秋　艸　道　人

ひんがしのやまべをけづりやまをさへしぬぎて
たてしこれのおほてら

あまたらすおほきほとけをきづかむとこぞりた
ちけむいにしへのひと

みほとけのうてなのはすのかがよひにう可ぶ三千
だいせんせかい

一々のしやかぞいませる千葉のはちすのうへに
た可しらすかも

あめつちをしらすみほとけとこしへにさかえむくにと
しきませるかも

くにのむた寺はさ可えむてらのむたくにはさかえむ
とのらしきみはも

いくとせのひとのち可らをささげこしおほき
ほとけはあふぐべき可な

うちあふぐのきのくまわの挿肱木まそほはだら
にはるびさしたり

あまぎらすみてらのいらかをちかたののべゆく
ひとはかすみとやみむ

そそりたついらかの鴟尾のあまつひにかがやく
なべにくにはさ可えむ

十八年二月廿六日　夜

（吉野新興株式会社用紙）

この吉野秀雄筆写會津八一歌稿にみられる「東大寺大佛讃歌」の着想がいつ得られ、またそれに序を置く構想がまとめられたかは明らかではないが、昭和十八年二月二十五日付吉野秀雄宛八一書簡（封書・ペン）が、現在のところ具体化の最も早い記録かと思われる。

○會津八一より　東京淀橋下落合三丁目一三二一
吉野秀雄宛　鎌倉市山町三七〇

（風筒裏）三月の十日には東大寺へまゐりこの歌を完成します。

二月末に鎌倉へまゐることは出来かねます。
随筆再刊五千部は数日前出来ました。

ところが、この封筒内には、八一からの手紙文や歌稿はなく、秀雄筆写の八一歌稿のみが在中している。

八一は秀雄に多くの書簡を送っているが、「八一・秀雄往復書簡」には、八一六百二十八通、秀雄百八十四通が収載されている。同書あとがきによれば、秀雄の書簡が少ないのは、昭和二十年四月、下落合の秋艸堂が空襲をうけ罹災したときに、それまでの秀雄書簡がすべて焼失したためである。

師弟関係は、秀雄の八一作二首の質問、それに対する八一の返書からはじまり、三十年に及ぶものとなる。

この両者の書簡のやりとりの中で、八一は自作歌について秀雄の意見を求め、秀雄はそれに対して真直に答えている。その際八一は送った歌稿や原稿の返送を要求した。

本書簡にはもともと手紙文はなく、歌稿のみが封入され封筒裏面に書かれた文面が手紙文であり、八一自筆の歌稿原本は返却（秀雄の意見、批評が書き添えられていたことは、次の八一書簡で明らか）するため、自筆で書写し残し置いたものと考えられる。

○昭和十八年三月一日　夕（消印二日）
（はがき・ペン）
會津八一より　東京市淀橋区下落合三丁目一三二一番地
吉野秀雄宛　鎌倉市山町三七〇

拙歌御批評忝く候。一々の一々にのところ自身迷ひ居りし點にて候。後に至りて「はちすのうへに」の「に」とさしあはずやといふ懸念にて「に」とせざりしもやはり「に」に可致候。『中央公論』四月號に出し可申候。
拙者十日のツバメにて奈良へ赴くべく候。御健康を最も御注意被下度候。

なお、このような例は、「讃歌」以前の場合においてもつぎの二点の八一書簡にみられる。

○昭和十五年九月十九日　（封書・ペン）
會津八一より
吉野秀雄宛
封筒のみ
秀雄筆写八一歌稿「雁来紅」十六首のみ在中しているところか

ら、写しをとり八一「雁来紅」原稿を返却したものと思われる。

○昭和十六年十二月二十二日（封書・ペン）

會津八一より　東京市淀橋区下落合三丁目一三二一番地滋樹園

吉野秀雄宛　鎌倉市小町二七〇（ママ）

別紙御一覧の上御返附被下度候。云々

秀雄筆写八一歌稿「望遠」五首も在中しており、八一文面にもある。返送する際に、やはり秀雄が写しをとったものと思われる。

なお、「讃歌」に関する八一書簡はつぎの通りである。

○昭和十八年三月二十三日（消印二十五日）（はがき・毛筆）

大仏讃歌十首（中公四月号）、大鐘六首（婦公五月号）、神武天皇二首（毎日）。

右十八首近日発表可致候。御目に入り候はゞ御一咲被下度候。讃歌は浄写の一巻として東大寺へ寄付いたし申し候。

○昭和十八年三月二十九日（絵はがき・ペン）

「中公」は松下の方でも最も早く売切れ候よし。最近に香薬師の歌五首を詠み候。「朝日」か「新女苑」に与へ可申と存じ候。「毎日」には神武天皇二首授けおき候。これは筆蹟を写真にして出す筈。大仏讃歌も写真版にて刊行の企も有之、進行致し居り候。かくの如く八方に活躍するものは老人としては拙者のみならむと存じ候。毎日の如くいろ〳〵の本屋来り原稿をせがみ候。拙者を撮りたる三浦氏の写真はすべてにて六七十種を超えるやうになり、自分ながら面白くながめ居候。これも頒布会が考へられ居り候。―

○昭和十八年四月八日（消印九日）（はがき・ペン）

『中央公論』やうやく此付近の書店にてもとめ候。御入用あらば御送り可申候。御一報可被下候。―

『婦人公論』へやりたる原稿を取りもどし『改造』へやり候。これは「洪鐘」六首にて候。五月号に出で可申候。大に繁昌いたし大に迷惑致し居り候。

○昭和十八年四月十二日（消印十三日）（絵はがき二枚・ペン）

―別封『中央公論』四月号を御送り致し候。世間の大歌人連が愛国の傑作を出し居る間も、拙者は自ら別様なる態度にて

旧に依って奈良を歌ひ居候。果していづれが愛国の誠意あるかは千年の後に確評あるべしと信じ候。自己に忠実なることが真の愛国と存じ候。

三浦氏の手にて拙者写真数十種出来致し候。

また東大寺内にて拙者歌碑一基建立したしと寺の希望もあれども、適当なる歌択びかね候。「おほらかに」が先づ問題になり居れども、あまり大味にて碑としては果して如何。他に何かよきものありや。御意見一応承りおきたく候。

『讃歌』は一巻の長軸に認めて先日東大寺へ納め候処、永く宝庫に収めて保存し国宝となるを待つべしと寺中喜びくれ、拙者も本懐に存じ候。—

四　中央公論（昭和十八年四月号）掲載「東大寺大佛讃歌十首并序」

東大寺大佛讃歌十首 并序

秋艸道人　會津八一

天平十三年四月　聖武天皇諸國に詔して國分寺を造らしめ、十五年十月、東大寺に盧舎那の大像を創めしめたまふ。その義、華厳梵網の所説に據りたまへるものの如し。予しばしば此寺に詣で、金容遍滿の偉觀を瞻仰し、うたた昔人の雄圖に感動せずんばあらず。かつて和歌一首を成せり。曰く「おほらかにもろてのゆびをひらかせておほきほとけはあまたらしたり」と。今日また來りて、その寶前に稽首し、退いてさらに十首を詠じ、以て前作の意を廣くせんとす。邦家いまや四海に率多し。希くは人天齊しく照鑑し、この聖皇の願願をして空しからざらしめんことを。　昭和十八年三月十一日南都客中

ひんがしのやまべをけづりやまをさへしぬきてたてしこれのおほてら
あまたらすおほきほとけをきづかむとこぞりたちけむいにしへのひと
みほとけのうてなのはすのかがよひにうかぶ三千だいせんせかい
一々のしやかぞいませる千葉のはちすのうへにたかしらすかも
あめつちをしらすみほとけとこしへにさかえむくにとしきませるかも
くにのむた寺はさかえむてらのむたくにさかえむとのらせけむかも
いくとせのひとのちからをささげこしおほきほとけはあふぐべきかな
うちあふぐのきのくまわのさし肱木まそほはだらにはるびさしたり
あまぎらすみてらのいらかあさにけにをちかたびとのかすみとやみむ
そそりたついらかの鴟尾のあまつひにかがやくなべにくにはさかえむ

— 61 —

（中央公論　昭和18年４月号）

三　吉野秀雄筆写の八一歌稿では、題は「東大寺大佛讃歌」と記されており、このときはじめて「東大寺大佛讃歌」に「十首并序」が加えられ「序」の本文が明らかとなる。

五　新資料上司海雲旧蔵會津八一自筆（ペン書）原稿「讃歌」（松本文庫蔵）

本稿巻頭写真版の「讃」は次の通りである。

東大寺大佛讃歌　并序（讃）

秋艸道人　會　津　八　一

天平十三年三月、聖武天皇諸国に詔して国分寺を造らしめ、十五年十月、東大寺〇盧舎那の大像を創めしめたま〻〻〻。その義、梵網経の所説に據りたまへるものの如し。予屢この寺に詣で、金容遍満の偉観を瞻仰して、うたた昔人の雄圖に感動せずんばあらず。かつて和歌一首を成せり。曰く「おほ〻〻〻にもろてのゆびをひらかせておほきほとけはあまたらしたり」と。今日また来りて、その寶前に稽首し、退いてさらに十首を詠じ、以て前作の意を廣くせんとす。邦家今や四海に事多し。希くは人天齋しく照鑑して、この聖皇の鴻願をして空しからざらしめんことを。

華厳

意

昭和十八年歳在三月十一日南都客中

ひんがしのやまべをけづりやまを〻〻〻しぬ

ぎてたてしこれのおほてら

あまたらすおほきほとけをきづかむとこぞ

りたちけむいにしへのひと

みほとけのうてなのはすのかがよひに〻〻〻

ぶさんぜんだいせんせかい

いちいちのしやかぞいませる〻〻〻のは〻〻〻

ちすのうへにたかしらすかも

あめつちをしらすみほとけとこしへにさか

えむくにとしきませるかも

くにのむたてらはさかえむてらのむたくに

さかえむとのらせけむかも

いくとせのひとのちからをささげこしおほ　こ
きほとけはあふぐべきかふ

うちあふぐのきのくまわのさしひちきまれ　肱木（ひぢき）　そ
ほはだらにはるびさしたり　肘

あまぎらすみてらのいらかあさにけにをち
かたびとのかすみとやみむ

四字消え
○○○○ついらかの鴟尾（しび）のあまつひにかが
やくふべにくにはさかえむ

ところが、二行組の本稿を上司海雲は採らなかった。

この原稿と同時に送られた、海雲宛書簡（昭和十八年三月十日付、全文は六）の追記に、八一は本稿のほかに

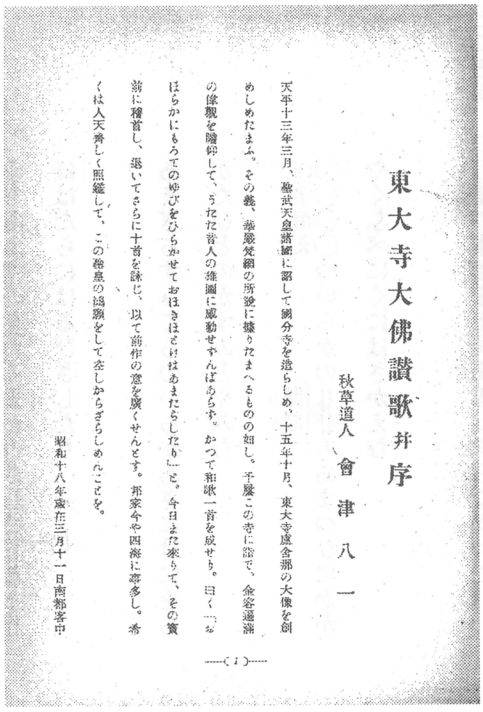
只今大佛讃歌原稿ともかくも御一覧に供する為め御送り申上候。假名ばかりにてかへってわかりにくき人もあるべしと存じ候。然る時は別紙（未出…筆者注）の如く五行に組むという手もあらむかと存じ候。

と「五行組（配列）」の提言もしており、海雲はこれを容れて、「雑華乃薗」五月号において、採用した。

そして、この「讃歌」原稿はそのまゝ手元にとどめおいたものと推測されるのである。

六　東大寺『雑華乃薗』第二十五号（昭和十八年五月号）掲載「讃歌」

（上司海雲が「雑華乃薗」で採った會津八一別提案の五行組み―原稿は未出）



東大寺大佛讃歌并序

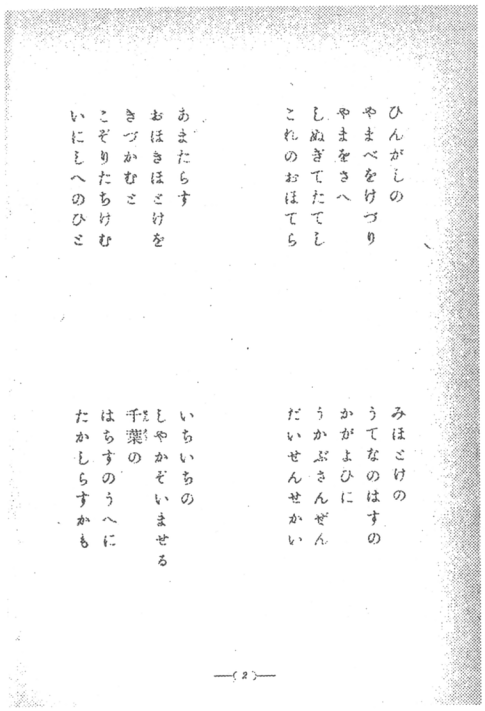
秋草道人　會津八一

天平十三年三月、聖武天皇詔勅に勅して國分寺を造らしめ、十五年十月、東大寺盧舎那の大像を創めしめたまふ。その義、華嚴覺經の所說に據りたまへるものの如し。千歲この寺に詣で、金容遍滿の偉觀を瞻仰して、うたた昔人の雄圖に感動せずんばあらず。かつて和歌一首を成せり。曰く「なほらかにもろてのゆびをひらかせておほきほとけはあまたらしたり」と。今日また來りて、その寶前に稽首し、退いてさらに十首を詠じ、以て前作の意を廣くせんとす。邦家今や四海に尊多し。希くは人天齊しく照鑑して、この聖恩の鴻徳をして杳しからざらしめんことを。

昭和十八年歳在三月十一日南都客中

―（1）―

（雑華乃薗　昭和18年５月号）　第１ページ



ひんがしの
やまべをけづり
やまをきへ
しぬぎてたてし
これのおほてら

みほとけの
うてなのはすの
かがよひに
うかぶさんぜん
だいせんせかい

あまたらす
おほきほとけを
きづかむと
こぞりたちけむ
いにしへのひと

いちいちの
しやかぞいませる
千葉の
はちすのうへに
たかしらすかも

―（2）―

同　第２ページ

あめつちを　いくさせの
しらすみほさけ　ひさのちからを
さかえむくにさ　おほきほさけは
しきませるかも　あふぐべきかな

くにのむた　うちあふぐ
てらはさかえむ　のきのくまわの
てらのむた　さし脇木
くにさかえむさ　まそほはだらに
のらせけむかも　はるびさしたり

同　第3ページ

あまぎらす　そそりたつ
みてらのいらか　いらかの鴟尾の
あさにけに　あまつひに
をちかたびとの　かがやくなべに
かすみとやみむ　くにはさかえむ

爾時普賢菩薩欲分別開示故告一切衆宮諸佛子當知此蓮華藏世界海是盧舎那佛本修菩薩行時於阿僧祇世界微塵數劫之所淨修世界海微塵數願行、佛子當知有須彌山微塵等風輪持此蓮華藏莊嚴世界海最下風輪名日平等住持一切寶光明地（中略）最上風輪名聚持一切香水海、彼香水海中有大蓮華名香幢光明莊嚴持此蓮華藏莊嚴世界海、此世界海邊有金剛圍山周匝圍遶、爾時普賢菩薩以偈頌曰

於此蓮華藏　莊嚴世界海　一切妙寶藏　種種淨光明　一切微塵等　過去佛所住　昔於諸有海
離垢悉清淨　無量大悲雲　充滿諸衆生　捨離自身　如佛刹塵數　於無量行海　常修令清淨
是故蓮華藏　世界海莊嚴　（中　略）　於此蓮華藏　世界海之内　一切衆生等
一一微塵中　見一切法界　一切諸佛雲　放寶光明照　是盧舎那刹　有無量自在　一切衆生等
蓮華中諸佛　興種種無量　自在變化雲　釋梵諸天衆　（中　略）　變化放光明　悉與法界等　華嚴經
一切光明中　出諸佛妙音

我今盧舎那　方坐蓮華臺　周匝千葉上　復現千釋迦　一華百億國　一國一釋迦　梵網經

同　第4ページ

會津先生からの手紙

上司海雲

近く遂行深い聖武天皇祭を迎へやうとする時にあたり、會津先生の玉稿をいただけたことは非常なよろこびであります。まことに羅漢像などはこのことを云ふのでありませう。編輯後記では少しながくなりますので、こゝに先生からの御手紙を紹介して、その間の消息を明かにし、皆様とよろこびをともにしたいと存じます。

二三みつからないのがありますので、最初このお正月ごろ私からお水取りに御参詣をお誘ひしたことゝ、そのときまたはそれと前後して本年は東大寺建立御願願千二百年にあたりますのでさうかよろしくとお願ひ申し上げておいたことゝを御承知をきねがひます。

△拝啓拙者奈良行きは十日のツバメにて出發と決心致し候。但し本日午後切符購入にやることにて入手困難の場合には十一日と可致候。

△小説家にして詩人なる大鹿卓氏（昨年新潮賞）、毎日新聞の三浦賀吉君（窓眞部長）、國民生活科學協會の宮川寅雄君同行せられ候。もつとも出發は皆々別々にて十一日夕刻にやうやく相揃ひ可申か。宿は日吉館。

△「東大寺大佛讃歌十首并序」といふものを「中央公論」四月號に出さしめ可申候。その歌を小さき一卷に自書したるものを今回持參し自ら盧舎那佛の御前に奉献致したく存候。これは年來幾度か參拜したる御禮の心にていささか後の記念にもと存じ候ことにて候。歌は自分としては近來最も會心のものにて候。中央公論四月號は三月廿日頃、即ち拙者歸東の後世に出で可申候。しかし綜合雑誌類はすべてサーキュレイションが昔日の如くゆたかならず世人の目に觸るゝことも昔の如くならずと存候間御覧の上にて御覧しければ「雑藻苑」の五月號又は其後適當の號に御再録被下候てもよろしく候。

△右の歌を書きし卷物は箱に入れてと存じ職人に命じ候ところ材料拂底の爲めひきうけがたしと申候間さしあたりボール箱とし後日出來をまちて木箱と御取換を乞ふべく候。

△前記三浦窓眞部長にたのみて大佛に拙者讃歌をささぐるところを撮影して貰ひたく存じ候。もしお許可被下候はゞ幸甚に存じ候べし。

△御水取は年中最も重大なる御行ぎにて御多忙を極められ候ことゝ存じ候へども前記の人々を伴ひて十二日朝一寸貴

同　第5ページ

院を御訪ね申上げ御水取拝觀につきて御相談を受け可申候。

三月七日午前　　會津八一

上司海雲師

只今大佛讃歌原稿ともかくも御一覧に供する爲め御送り申上候報名ばかりにてかへつてわかりにくき人もあるべしと存じ候都る時は別紙の如く五行に組むといふ手もあらむかと存じ候。

別紙原稿のうち「梵網經の所説」といふ句は「華嚴梵網の所説」と御訂正被下度候

三月七日落二信（ハガキ）

拝啓先便には大佛縁の御前で讃歌を奉唱するといふ少々奇抜な案を申上げましたがあれは撤ひ下げさしその讃歌の幾子は十日ツバメにて拙者持參してこにかく御寺へ奉納いたします宜しく御ふくみの上御取計らひを願ひ上げます

三月九日（ハガキ）

拝啓（前略）

さて又先般差上げし大佛讃歌もし「雑藻の苑」に御掲載被下候ものならば最初の部分の「東大寺に盧舎那の大像を創めしめたまふ」といふところの「に」といふ字を削りおき被下度候天平十五年十月には近江國にて發願せしめられしことはわかり切つたることなれども此場合東大寺を主として出來るだけ簡潔に驚かんとおもひてあんな風にしたれども本のままでは大佛以前に東大寺といふ寺ありてその寺へ十五年十月から大佛の工事が始まりたるものゝ如く聞えて誤解に陥る。「に」を去る時はその憂無かるべく候。拙者推敲の不足の感無き能はず又「さしひらき」にもし「弦」といふあて字致し居り候はゞこれも前述の如く「料」といふ方に改めおき被下度候尚は先日献納したる卷物にも「東大寺に」とありしと覚なればこれは他日參詣の際自身訂正致すことゝ可致候。

三月廿五日（遥遠）　　會津八一

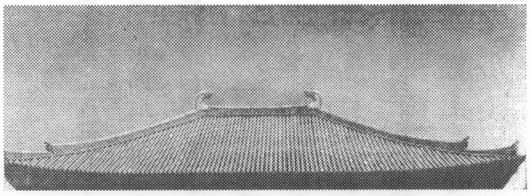
上司海雲師

私はいつものことながら、先生の風韻と、その書と、その歌と、その隨筆とを思ひうかべては感嘆これを久しうするのであります。

同　第6ページ

昭和十八年五月一日印刷納本
昭和十八年五月五日發行（毎月一回五日發行）雜誌第三十九號

雜華乃薗



五月號

華嚴宗東大寺發行

同　表紙

感謝錄

金六　圓也　上野　村治郎氏殿

金壹圓五拾錢也　福岡　佐藤よしの殿

金貳　圓也　大阪　近藤　初調殿

編輯後記

○妙に不順だつた今年の春も漸く水調子になりました。蕗つゝぢなど例年よりは少しおくれさせうがやがて咲き揃ふことゝ思ひます。小野老の有名な歌ちやありませんが、咲く花の薫ふが如く人々の心も美しく香り高くあつてほしいと切に思ひます。排他、怨嗟、偏狭、何と云ふかなしむべき現象でしよう。死活興亡、そして貴いギセイな眞剣に考へて私たちはもつともつと謹語になられねばなりません。心を清く美しく高く保たれねばなりません。怖ろしいのは物資の欠乏ではなくして、美しい心の欠缺であり消失であります。

○會津先生は私の恒に考へ、百眞言を覺して云へなかつたことを十首の歌に全部つくして下さいました。少しなじみのうすい言葉は字典を引いても愛唱調ひ度う存じます。

○忙しい北川さんにたのんで「塔頭のはてより」を書いてもらひました。私ならばいたづらに涙ながすところを、北川さんの薫筆は貴い幻想を先へ先へと引われ力づけて呉れます。希望と光明の見え初めた五月、脱稿された五月であります。

本誌定價
一部　郵稅共　金拾五錢
一ヶ年　〃　一圓五十錢

昭和十八年五月一日印刷
昭和十八年五月五日發行
（毎月一回、五日發行）
通卷第三十九號

奈良市鹿司町四〇六番地
華嚴宗東大寺
發行所　雜華乃園發行所
東大寺名義　電話二〇二九番
振替大阪三六一七五番

奈良市鹿司町五三番地歌
編輯兼
發行人　栗原武平

奈良市中濱水町九四二
印刷人　長澤恒二

奈良市西寺林町十四番地
印刷所　奈良共同印刷株式會社
電話二三〇四番

同　最終ページ

ここで、上司海雲の「會津八一先生の手紙」に前後する両者の交渉の様子を知るため、八一から海雲宛の若干の書簡をとりあげる。（中央公論社「會津八一全集第十巻書簡下」）

なお、海雲から八一への書簡は前にも觸れた通り、空襲被災によりこの時期のものは消失している。

○昭和十七年十月四日

拜啓　御ぶさた致し居候ところ御きげんよろしくめでたく存じ候。來る十日學生を率ゐて御地へ出で十一日貴刹參詣を期し居り候。例の如く御迷惑ながら御ひきまはし被下度候。但し今年は人數例年よりも多く候へば、まゐり候ても決して御構被下るまじく候。いつも心苦しく存居り候ことなるも、今年は一入と存じ予め御謝辭申上候。委細は茂見より可申上候。小生のみは七日に一人出發し京都にたちより十日朝皆と共に奈良入りと可相成候。そのせつ色紙一枚呈上を期し居り候。

十月四日　　會津八一

上司師

○同年十一月三日（消印四日）

拜啓　今回も一方ならぬ御世話に相成り一同感激致し候。ことに我等數輩は格別御馳走に相成りありがたく御禮申上候。然るに再び御寵招を忝うしたるも出發前夜とて拜辭致し候次第にて候。御一同へ短冊といふ御話もありしも、近來毎日の如く依頼蝟集致し候ため各方面すべて謝絶致し居り候間、諸公へもあしからず御傳へ被下度候。唯だ大毎の歳末義金週間のために短冊二枚を托しおき候。何人に歸するやを知らず候。

又歌碑の御話も承りしことあるも、宗教團體法とやらなかなかやかましきよしにて新藥師寺の分もまだ當局の許可なきよしにて候。且つ在住の彫刻者割合に無理解にて彫法も巧なりとも申されず候間此等の點も危まれ候。寺地以外の所にてよき彫師の手に成るものを建て得るにあらざればどのみち面白からぬ結果と可相成候。市會の許可を得て嫩草山下あたりに一基建立するといふやうな空想も懐き居り候へども、實現はなか〳〵困難らしく候。從來學年末のために御水取は拜見致しかねしも明春は特別にて學年末にあらず候へば、其頃或いは參上可致かと存じ候。但し約束を守らぬことでは悪評高き拙者のこと故あてになし玉はざるが宜しく候。

隨筆は本日まだ出來せず新聞には五日頃出來とあり、貴下のみには一本を獻呈可致候へども他は木原か永野あたりにて御入手を乞ふやうに可相成かと被存候。近墨三冊同送致し候。かの晩御列席の諸公へ御贈り被下度願候。御自愛可被下候。敬具

十一月三日　　會津八一

上司海雲師

○昭和十八年三月二十四日

拝啓　本日微雨久々讀書のところへ小包にて二月堂壇供御贈附ありがたく奉謝上候。

早速毎日新聞寫眞部長三浦寅吉、同社生活料學化協會宮川寅雄、小説家大鹿卓の三君へ相頒ち行事拝観の記念と可致候。前後にわたりいろ〳〵御配慮まことに恐縮の至りにて一同を代表して御禮申上候。

御自愛可被下候。

三月廿四日　　會津八一

上司海雲師

○同年三月二十五日

拝啓　御遣しの壇供は昨日それ〴〵同行のものへ相頒ち申し候。いろ〳〵御心づかひ被下忝く奉存候。

さて又先般差し上げし大佛讃歌もし「雜華の苑[5]」に御掲載被下候ものならば、最初の部分の「東大寺に盧舎那の大像を創めしめたまふ」といふところの「に」といふ字を削りおき被下度候。天平十五年十月には近江國にて着手せしめられしことはわかり切つたることなれども、此場合東大寺を主として出來るだけ簡潔に書かんとおもひてあんな風にしたれども、あのままでは大佛以前に東大寺といふ寺ありて、その寺へ十五年十月から大佛の工事が始まりたるものの如く聞えては遺憾に候。「に」を去る時はその憂無かるべく候。拙者推敲の不足の致すところにて候。又「さしひぢき」にもし「肱」といふあて字致し居り候はゞ、これも普通の如く「肘」といふ方に改めおき被下度候。

尚ほ先日獻納したる巻物にも「東大寺に」とありし筈なれば、これは他日參詣の際自身訂正致すことと可致候。

右のみ如此候。

三月廿五日　　會津八一

上司海雲師

○同年五月三十一日（消印六月二日）

陰霖相催し鬱陶しく候ところ、御多祥賀上候。本日は貴著東大寺壹部御惠投忝く拝受致し候。手に取るよりぱら〳〵と披覧致し候に、甚だ豐富なる材料にて甚だ行きとどきてこまやかにものされ居る如くに被存候。いづれよく拝見可致候。東大寺研究として大なる御貢獻と存じ候。雜華[6]は先日澤山頂戴致し、諸人

へ相わかち申候。歌碑の歌の選擇は、貴刹の御意見として十首中の最後のものを望まるるよしを申し越したる人あり、此人は寺外の人なれども、風聞のまま申越されたるらしきも、それに基きてかの一首を清書してすでに管長の御手もとへ御送り申上げおき候。

拙者近日或いは西下して拜眉の機會あるべしと存じ候。しかしいつも應接に勞るるのみにて、歌も仕事も出來かぬること多く、もつたいなき事ながら、いささかまた困りもいたし候。それ故今回は拙者西下のことは一切御内密に願度候。ことに揮毫はすべて謝絶と御ふくみ被下度候。當地に在りても謝絶致し居り候ことにて候。

五月卅一日　　秋艸朔

上司海雲師

八一は、戦局が進むにつれ、諸物資の逼迫により、出版用の用紙調達が困難となりつつあることを知っており、この後わずか半月後に、前述の大幅な用紙削減の措置がなされることを予見していたとみえ、昭和十七年十二月十二日吉野秀雄宛書簡で、

―用紙制限ます〳〵甚しく、明春からは著述といふことはいよ〳〵困難となるべく候。何か将来に出すつもりのものはつまり早く出しておかねば、今後はだん〳〵むづかしくなるばかりかと存じ候。―

と云っている。

筆者の手元にある八一寄稿の中央公論、改造などをみても、傾向は顕著にあらわれている。

特にページ数の減少は目をおおうものがある。

例えば、

中央公論

昭和十六年十月秋季特大号四三六頁

（八一、「西大寺の邪鬼」収載）

昭和十七年四月号二八八頁

（八一、「紅日」収載）

昭和十七年六月号二四〇頁

（八一、法隆寺随筆一「斑鳩」収載）

大幅な用紙削減があった後の、「東大寺大佛讃歌十首并序」が収載された

昭和十八年四月号一六〇頁

さらに、

昭和十九年二月号一〇四頁

（八一、「嶺雪」収載）

と減少し、さらに敗戦後の困難につながってゆく。

改造では、もっと厳しい。

昭和十六年一月号五四四頁

（八一、「龍安寺」収載）

昭和十七年五月号二二四頁

（八一、「小鳥飼」収載）

昭和十八年五月号一二八頁

（八一、「洪鐘」収載）

文芸春秋では、昭和十七年六月号の二〇八頁から昭和十九年六月号の七二頁へ激減。

その上、紙質は悪くなる一方。理想的な掲載条件を求める八一にとって、一頁はおろか六分之一頁ほどの「カコミ」に小さな活字で押し込まれる粗末な扱いは、まさに時代とはいえ、我慢のならぬことであったと思われる。しかも、丁度八一の作歌意欲の旺盛な多作の時期に当たってのこの厳しい事情はよほどつらいことではなかったか。

東大寺建立発願千二百年聖武天皇祭という盛事に奉参するとともに、更に「讃歌」の広がりをも願う八一が、海雲の「雑華乃薗」を頼もうとしたことは、充分理解出来ることなのである。

八一を深く敬愛していた海雲は、これに応えて自己の編集する「雑華乃薗」に八一の寄稿を求めるとともに、多大の紙面を用意し、限りある部数のところを出来うる限りの増刷をしたものとみえる。

このあと、八一は海雲の此度の厚意と頃年の世話を大いに多とし、酬いようとしたかの如く、海雲公刊の「東大寺」に対して、書簡で賛辞を呈している。

○昭和十八年九月二十二日（消印九月二十三日）封書ペン

拝啓　貴著「東大寺」はざつと拝見して近来の好著と存じ來訪の人々にも勸めなど致し居りしも最近再び精讀致し、昨夜深更に至りて卒讀致し候。單に面白いとか近來の好著だとかいふべきものでなく、貴下が熱情と誠意とを傾注されし大作と改めて敬意を表し候。古くして由緒ある大刹の歴史を談りながら現在の人事に至るまであます無く、しかもその間に自家の體驗を告白し一面には華嚴宗の衰頽を慨せらるるに豐富にして自在なる文章を以てせらるるところ現代何人も眞似の出來ることにあらず。眞に容易ならざる仕事を成就せられたるものかなと感心致し候。これに對して寺内の普通の坊さんたちが何かかれこれ申さるるといふ御なげきも承り候へども、なるほどそれ位のこと

は大にあるべしと存じ候。何か仕事をすれば普通の人はかれこれ申すものにて候。貴下が力を揮つて攪き回されたるために飛沫も多く音も高く候なり。

拙者夏中は少しく夏まけの氣味にて暫し醫藥に親しみしも、今は平癒して今日は學校の編入試驗にも出席致し候。十月末にもならばまた學生を伴ひて御地へまゐるべく候。記念式典といふこともあり貴刹皆様これから御骨の折ることなるべし。御自愛可被下候。

歌碑の工事は着手せられし筈にて候。更にそのほかに尚ほ一基の歌碑を建立せんとする企あり、より〳〵に話進み居り候。委細は拜芝を期し候。

九月廿二日　　會津八一

上司海雲師

海雲は、東大寺造立発願千二百年祭を迎えるに当たり、この自著「東大寺」を著はすとともに、さらにその記念出版として昭和十八年十月十五日刊行された「雑華厳浄」（以下「厳浄」という）をも担当することになった「雑華乃薗」編輯部担当として、

―お寺では今年の始めいや昨年の暮れから記念法要を中心にいろんな事業の計画がたてられたのであります。私もよろこびと感激にみちて、私相應の助力をしたいものと決心したのでした。それには御法要は勿論でありますが、記念出版に力を入れることが私には一番適したことと考へ、美術、文学、文献などいろいろな面からの出版を夢見て、希望と幸福とに胸おどらせておりました。ところがさうしたもくろみも一寸した支障から何一つ御法要の間に合ひそうもなくなってしまひました。それにつけても私は東大寺造立の計画のおほきさとしかもそれが実現したことを今更のやうに驚嘆し、天平のえらさ、その協力の美しさにむしろあきれさへするのでありました。―（「厳浄」あとがき）

と、出版企画熱心のあまり、いろいろと無理、軋轢を生じたことを記し、周囲へ皮肉を云っている。「厳浄」でも八一に対し、題字を乞い、寄稿を求めた。そのことを「あとがき」に続ける。

―学年末の御多用と加ふるに御不快のなかから立派なお歌と堂々たる題字とをくださいました會津先生に深い感謝感激を捧げ、物資、人手、時間等あらゆる点から無理だったこの出版を―

と書くが、ここにも海雲の強引とも云える熱意をみることができる。

「厳浄」の八一題字と東大寺雑詠（十三首）は次の通りである。

八一題字（「雜華嚴淨」カヴァー）

東大寺雜詠

會津八一

大佛殿にて

おほらかにもろてのゆびをひらかせておほきほとけはあまたらしたり
あまたたびこのひろまへにめぐりきてたちたるわれぞしるやみほとけ

戒壇院をいでて

ぴるばくしやまゆねよせたるまなざしをまなこにみつつあきののをゆく

東大寺懐古

おほてらのほとけのかぎりひともしてよるのみゆきをまつぞゆゆしき
おほてらのにはのはたほこさよふけてぬひのほとけにつゆぞおきにける

東大寺の某院を訪ねて

おとなへば僧たちいでておぼろげにわれをむかふるいしだたみかな

戒壇院にて

うつろひしみだうにたちてぬばたまのいしのひとみのなにをかもみる
かいだんのまひるのやみにたちつれてふるきみかどのゆめをこそまもれ

十月十七日東大寺にて

おほてらのひるのおまへにあぶらつきてひかりかそけきともしびのかず
おほてらのひるのともしびたえずともいかなるひとかとはにあらめや

三月堂にて

びしやもんのおもきかかとにまろびふすおにのもだえもちとせへにけむ

觀音院にて

むかしきてかたりしひとのおもかげのしろきふすまをさりがてにすも
てらにはのひるはしづけしみづみてていしにすへたるみんげいのかめ

観音院にての第二首「てらにはの」は、昭和十九年九月養徳社刊「山光集」では、注として、

みんげいのかめ・現住上司海雲師は民藝の陶瓶を蒐集して甚だ富めり

とわざわざ説明を加えて好意の一端を示している。

つぎの書簡は

○十月十日（消印十月十一日）封書毛筆

來る十五日は重大なる御法會にて御多忙の事と存じ候。拙者も末席を汚したく存じ居りしも寺カラノ招待モ無ク又學生の徴集せられ去るもの多く只今は最後の講義を授けるところなれば學生も氣込み居り候こと故、一時間も缺席しがたく候。依て不參なり。拙者十月下旬參上いたし候やう申おきしも學生檢査の日取のため修學旅行は十一月中旬まで延期いたし候。御承知被下度候。

大學の統合といふことが近く行はるるよしにて東京帝大の文科は仙臺へ移りて合併するよし申候。早稲田は如何様になり行くものか知るべからず候へども、吾等は學藝文墨以外のことは出來申さず、ことに老境に入りかけ居ること故これ以外に奉公の途はもとめがたく存じ候。今の大學は歐洲中世の寺院の學苑に端を發したるものにて候へば早稲田の角帽もガウンも僧院の餘風にて候。御寺を大切にせぬ世の中が大學を粗末に扱ふことも道理と存候。しかしいつの時代にても、眞に學問が大切にされたといふことも無ければ今にして何をか驚かむ。讀みさしの書物を讀みつづけゆくよりほかの事は存じ申さず候。あなかしこ〳〵

十月十日　　會津八一

上司海雲師

拙者書面の文意は御發表被下るまじく候。（封筒裏に）

であるが、八一は十月十五日の記念大法會に参加したいと願いつつも大学の都合、それに寺カラノ招待モ無ク不本意（ママ・印筆者）ながら不参にすると述べている。三月には「讃歌」を大佛に奉献し、十月の大法會に参ずる心算は実行できなかったのである。ここでは、「讃歌」で示した自己の熱心を寺側が招待もしない扱いをしたことで大いに面子を失った不満をあからさまにしている。

同時に、時局いよいよ緊迫してくるなか、寺も大学も大切にしない世の中へその矛先を向けるのである。

この後も敗戦を経て、昭和二十五年頃まで書簡による交渉があったことは公表された資料で推察される。

さて、これほど八一にぞっこん惚れ込んでいた海雲と八一との仲がその後巷間疎隔していったとされていることについて参考までに先師宮川寅雄が、自著『歳月の碑』「観音院・海雲法師」に述べていることを紹介しておく。

―海雲さんは時々、私に云った。「會津先生の悪口を云っていいね」と。私はにたにたとしてうなずくと、一座に向かって、気むずかしい會津八一を批評した。私にはそれほど気むずかしくなかったし、手紙では叱られても面とむかって叱られたことのない先生だが、海雲法師は、ちらりと非難するのだった。つまり時効になった鬱憤なのである。かれには會津八一に対する畏敬と反発が、いつも同居していた。―

さらに、

―海雲和上は自分でよく破戒無慚などと、言ったりしたが、私はそれらしいことは何も知らず、いつも上品で、エレガントで、趣味人としての和上しか知らない。宗教的側面は、こればかりは理論的に理解できるわけのものでもないから、凡夫の私には無理である。

親切で、優しく、ちょっとばかり我儘で気むずかしく、（以上・点筆者）容姿端麗な海雲和上を、私は好きだった。―

つまり、八一と海雲はお互い、程度の差はあっても「我が儘で、気むずかしい」同士であったのである。

八一が、空襲被災、新潟転住、家庭事情によって次第に奈良から遠ざかってゆくに従って海雲との関係も疎隔していったと推測される。

このあたりのことは、頃日春、東京の古書店に一括出現の上司海雲宛八一葉書一〇八枚、書簡一三通が、地元奈良の大学に納められたと仄聞しているので近い将来発表されその検証が可能となるとともに、合わせて新潟市會津八一記念館の所蔵のなかに戦後の八一宛海雲書簡の存在について探究が進めば一層くわしい経緯

が明らかにされるであろう。

註（1）昭和十八年四月十九日亀井勝一郎宛書簡において、八一は、
―拙作の大佛讃歌十首并序を長巻に揮毫したるものを東大寺へ寄贈致しおき候。歌は「中央公論」にかかげし如きものにて候。但し「中央公論」の序文のうち「東大寺に盧舎那の云々」とある「に」の字は衍字にて候。―
と、「讃歌」一巻献納の目的を一応果たしたことを報らせるとともに、「序」の用字の訂正について説明を加えることまでしている。
後年、筆者は当時の東大寺管長清水公照貌下のお許しを得てお水取りの諸行事を拝観する機会があった。二月堂内奥深く、韃靼の行法のただなかに坐した思いに酔い、翌朝願いかなって東大寺本坊客殿大廣間において、床の間に懸けられた八一献納の大幅「讃歌」をおさえきれないほどの感動をもって拝見したことを想い出す。

（2）昭和十七年十二月二十八日、日本出版社協会（昭和十五年、「出版報国」を目的として政府主導下に設立された全国出版業者の組織）が用紙の割り当てを大幅に削減を行い、単行本五割、雑誌四割の減配となる。
さらにその後いよいよ敗戦の色ますます濃厚となった昭和十九年十二月、出版物統制の目的で「非常用文芸図書」が制定されている。

（3）「雑華苑」は八一の思い違いで、正しくは「雑華乃薗」のこと。「ザツケノソノ」と読む。八一は、のちの書簡でもなお「雑華の苑」と間違って書いている。（昭和十八年三月二十五日、上司海雲宛封書ペン）
東大寺雑華乃薗発行所が少部数（恐らく二、三百部か）発行（毎月一回）し、関係者に贈呈していたときく。

（4）奇しくも八一絶筆の香川県五剱山八栗寺の鐘銘歌
わたつみの
そこゆくうをの
ひれにさへ
ひひけこのかね
のりのみために
は五行組で書かれてある。

（5）「雑華乃薗」のこと。

（6）海雲宛の書簡で二度も間違ったことに八一は気付いたと思われるが、知らぬ顔で「乃薗」を略したようにして「雑華」とのみ書いている。

七　中央公論社（昭和二十六年五月）刊會津八一全歌集中「大佛讃歌」

大佛讃歌

昭和十八年三月

天平十三年四月聖武天皇諸国に詔して国分寺を建てしめ十五年十月東大寺盧舎那の大像を創めしめたまふその義華嚴梵網の所説に據りたまへるものの如し予しばしば此寺に詣で金容遍満の偉觀を瞻仰してうたた昔人の雄圖に感動せずんばあらずかって和歌一首を成せり曰く「おほらかにもろてのゆびをひらかせておほきほとけはあまたらしたり」と今日また来りてその寶前に稽首し退いてさらに十首を詠じ以て前作の意を廣めむとす邦家いまや四海に事多し希くは人天齋しく照鑑してこの聖皇の鴻願をして空しからざらしめむことを

昭和十八年三月十一日

ひむがし　の　やまべ　を　けづり　やま　を　さへ　しぬぎて
たてし　これ　の　おほてら

あまたらす　おほき　ほとけ　を　きづかむ　と　こぞり　たち
けむ　いにしへ　の　ひと

みほとけ　の　うてな　の　はす　の　かがよひ　に　うかぶ
三千　だいせん　せかい

いちいち　の　しやか　ぞ　いませる　千えふ　の　はちす　の
うへ　に　たかしらす　かも

あめつち　を　しらす　みほとけ　とこしへ　に　さかえむ
くに　と　しきませる　かも

くに　の　むた　てら　は　さかえむ　てら　の　むた　くに
さかえむ　と　のらせ　けむ　かも

いく　とせ　の　ひと　の　ちから　を　ささげ　こし　おほき
ほとけ　は　あふぐ　べき　かな

うち　あふぐ　のき　の　くまわ　の　さしひぢき　まそほ
はだら　に　はるび　さし　たり

あまぎらす　みてら　の　いらか　あさ　に　け　に
をちかた　びと　の　かすみ　と　や　みむ

そそりたつ　いらか　の　しび　の　あまつひ　に　かがやく
なべ　に　くに　は　さかえむ

これは、會津八一が長い間多くの歌作を通じて、工夫に工夫を重ね、試みに試みた最終の表記法である「語分け」形式となっている。

八一は、昭和二十六年「會津八一全歌集」（中央公論社板）を出版するに当たり、例言を以て、

―いやしくも日本語にて歌を詠まんほどのものが、音聲を以て耳より聴取するに最も便利なるべき假名書きを疎んずるの風あるを見て、解しがたしとするものなり。―深く自ら決するところありて、假名のみにて記しても、尚ほ人のたやすく理解しくるる如き歌を作らばやと、己を鞭ちつつあるなり。―世上に行はるる如く、無理なる漢語に、甚だ身勝手なる振假名をつけて、それによりてやうやく意味の疏通を助け、もし得べくんば、含蓄をも深めんとする如き態度は、世界第一の奇観にはあらざるか―されどまた、従来著者が行ひ来りし如く、假名のみにて歌を綴りながら、一字一字の間隔を均一にせば、歐亜諸国の文章よりも、遙かに讀み下しにくきものとなるべきに気附きたれば、この全歌集に於ては、単語の識別に便ならしむるやうに、その間隔を加減し、活字の組み方に變革を斷行したり。―この歌集こそ、数年を出でずして、わかき国民の間には最も讀み易き書物となるべきなり。

と、自信を以て言い切っている。

英文学者であり、和漢古典に深く通暁した八一の結論の弁である。

急速に進展してとどまるところが見えない現今のＩＴ革命下において、はなはだ先見的いや予言的八一の言ではある。

なお、決定版ともいえる中央公論社版の會津八一全集（全十二巻本）では、後勁の補正に俟つとしながらも、自註鹿鳴集で八一がとっている語分けを最終のものとしたとことわっている。次に校異を掲げる。

第三首　三千　だいせん　せかい→三千だいせんせかい
第七首　いく　とせ→いくとせ
第八首　うち　あふぐ→うちあふぐ
　　はだら　に→はだらに
　　さし　たり→さしたり

第九首　をちかた　びと→をちかたびと
第十首　そそりたつ→　そそり　たつ
なべ　に→なべに

八　求龍堂（昭和四十二年五月）刊「東大寺大佛讃歌」（詠艸會津八一、添画杉本健吉）

昭和四十二（一九六七）年五月求龍堂刊（限定三百五十部）

東大寺大佛讃歌　詠艸　會津八一
添画　杉本健吉

東大寺大佛讃歌　讀

一切虚空
界　光　明
遍　充　満
秋艸道人會朔
薫沐拜写
印　印

ひむかしのやまへをけつりやまをさへ
しぬきてたてしこれのおほてら

あまたらすおほきほとけをきつかむと
こそりたちけむいにしへのひと

みほとけのうてなのはすのかかよひに
うかふ三千たいせんせかい

いちいちのしやかそいませるせんえうの
はちすのうへにたかしらすかも

あめつちをしらすみほとけとこしへに
さかえむくにとしきませるかも

くにのむたてらはさかえむてらのむた
くにさかえむとのらせけむかも

いくとせのひとのちからをささけこし
おほきほとけはあふくへきかな

うちあふくのきのくまわのさしひちき

まそほはたらにはるひさしたり

あまきらすみてらのいらかあさにけに
をちかたひとのかすみとやみむ

上司海雲

會津先生ほど奈良を愛され、杉本さんほど奈良に惚れこんだ人を私は知りません。博士は奈良を完全に詠みつくされ、画伯もまた奈良を見事に描きつくした感があります。

またお二人ほど東大寺を理解してくれた人はなく、これまで誰もとり上げようとしなかった、というよりは誰もとりくめなかった大佛さまや大佛殿を、すぐれた歌や絵にされました。中でも「東大寺大佛讃歌」は東大寺の圧巻、大佛の決定版であります。

奈良が日毎にこわされてゆき、大佛さまが単なる文化財、ただの観光資源にされつつある昨今、この出版は私や東大寺だけのよろこびではなく、奈良いな日本にとっても意義あるものと信じます。

會津八一没後、八一が一首ずつ色紙型に墨書で書き残したものに、杉本健吉がそれぞれ添画をしたものである。

従って、字配りは色紙に合わせ形良く納まるようになされていて、一首〳〵それは異っている。筆で書かれた独往のかな字は、どれをみても心地よく目を楽しませるが、八一は、墨筆でのかな書きにおいて、声調と書を最もよく調和させることができると思っていたのではないか。自在の境地に躍るかな書きの妙は、観る者をして酔わしめ、唱わしめる。

九　参考「讃歌十首」各歌の表記・体裁の時系変化

第一首

①ひんがしのやまべをけづりやまをさへしぬぎて
たてしこれのおほてら

②ひんがしのやまべをけづりやまをさへしぬぎてたてしこれのおほてら

③ひんがしのやまべをけづりやまをさへしぬ
ぎてたてしこれのおほてら

④ひんがしの
やまべをけづり
やまをさへ
しぬぎてたてし
これのおほてら

⑤ひむがし　の　やまべ　を　けづり　やま　を　さへ　しぬぎて　たてし　これ　の　おほてら

⑥ひむがし　の　やまべ　を　けづり　やま　を　さへ
しぬぎて　たてし　これ　の　おほてら

⑦ひむかしのやまへ
を
けつりやまを
さへ
しぬきてたてし
これのおほ
てら

第二首

①あまたらすおほきほとけをきづかむとこぞりた
ちけむいにしへのひと

②あまたらすおほきほとけをきづかむとこぞりたちけむいにしへのひと

③あまたらすおほきほとけをきづかむとこぞ
りたちけむいにしへのひと

④あまたらす
おほきほとけを
きづかむと
こぞりたちけむ
いにしへのひと

⑤あまたらす　おほき　ほとけ　を　きづか　む　と　こぞり　たち
けむ　いにしへ　の　ひと

⑥あまたらす　おほき　ほとけ　を　きづか　む　と
こぞり　たち　けむ　いにしへ　の　ひと

⑦あまたらすおほ
ほとけをきつかむ（き）と
こそりたちけむ
いにしへのひと

第三首

①みほとけのうてなのはすのかがよひにう可ぶ三千
だいせんせかい

②みほとけのうてなのはすのかがよひにうかぶ三千（さんぜん）だいせんせかい

③みほとけのうてなのはすのかがよひにうか
ぶさんぜんだいせんせかい

④みほとけの
うてなのはすの
かがよひに
うかぶさんぜん
だいせんせかい

⑤みほとけ　の　うてな　の　はす　の　か　がよひ　に　うかぶ
三千　だいせん　せかい

⑥みほとけ　の　うてな　の　はす　の　かがよひ　に
うかぶ　三千だいせんせかい

⑦みほとけの
うてなのはす
の
かかよひに
うかふ三千
たいせんせかい

第四首

①一々のしやかぞいませる千葉のはちすのうへに
た可しらすかも

②一々(いちいち)のしやかぞいませる千葉(せんえふ)のはちすのうへにたかしらすかも

③いちいちのしやかぞいませる千葉(せんえう)のは
ちすのうへにたかしらすかも

④いちいちの
しやかぞいませる
千葉(せんえう)の
はちすのうへに
たかしらすかも

⑤いちいち の しやか ぞ いませる 千 えふ の はちす の
うへ に たかしらす かも

⑥いちいち の しやか ぞ いませる 千 えふ の
はちす の うへ に たかしらす かも

⑦いちいちの
しやかそ
いませる
せんえうの
はちすの
うへに
たかしらすかも

第五首

①あめつちをしらすみほとけとこしへにさかえむくにと
しきませるかも

②あめつちをしらすみほとけとこしへにさかえむくにとしきませるかも

③あめつちをしらすみほとけとこしへにさか
えむくにとしきませるかも

④あめつちを
しらすみほとけ
とこしへに
さかえむくにと
しきませるかも

⑤あめつち　を　しらす　みほとけ　とこしへ　に　さかえむ
くに　と　しきませる　かも

⑥あめつち　を　しらす　みほとけ　とこしへ　に
さかえむ　くに　と　しきませる　かも

⑦あめつちを
しらす
みほとけ
とこしへに
さかえむくにと
しきませる
かも

第六首

①くにのむた寺はさ可えむてらのむたくにはさかえむ
とのらしきみはも

②くにのむた寺（てら）はさかえむてらのむたくにさかえむとのらせけむかも

③くにのむたてらはさかえむてらのむたくに
さかえむとのらせけむかも

④くにのむた
てらはさかえむ
てらのむた
くにさかえむと
のらせけむかも

⑤くに　の　むた　てら　は　さかえむ　てら　の　むた　くに
さかえむ　と　のら　せ　けむ　かも

⑥くに　の　むた　てら　は　さかえむ　てら　の　むた
くに　さかえむ　と　のら　せ　けむ　かも

⑦くにのむた
てらはさかえむ
てらのむた
くにさか
えむ
と
のらせけむ
かも

第七首

①いくとせのひとのち可らをささげこしおほき
ほとけはあふぐべき可な

②いくとせのひとのちからをささげこしおほきほとけはあふぐべきかな

③いくとせのひとのちからをささげこしおほ
きほとけはあふぐべきかふ

④いくとせの
ひとのちからを
ささげこし
おほきほとけは
あふぐべきかな

⑤いく　とせ　の　ひと　の　ちから　を　ささげ　こし　おほき
ほとけ　は　あふ　ぐ　べき　かな

⑥いくとせ　の　ひと　の　ちから　を　さ　さげ　こし
おほき　ほとけ　は　あふぐ　べき　かな

⑦いくとせのひとの
ちからを
ささけこし
おほきほとけ
は
あふくへき
かな

第八首

①うちあふぐのきのくまわの挿肱木まそほはだら
にはるびさしたり

②うちあふぐのきのくまわのさし肱木まそほはだらにはるびさしたり

③うちあふぐのきのくまわのさし肘木まそ
ほはだらにはるびさしたり

④うちあふぐ
のきのくまわの
さし肘木
まそほはだらに
はるびさしたり

⑤うち　あふぐ　のき　の　くまわ　の　さしひじき　まそほ
はだら　に　はるび　さし　たり

⑥うちあふぐ　のき　の　くまわ　の　さしひぢき
まそほ　はだらに　はるび　さした　り

⑦うちあふくのき　の
くまわの
さしひちき
まそほはたらに
はるひ
さしたり

第九首

①あまぎらすみてらのいらかをちかたののべゆく
ひとはかすみとやみむ

②あまぎらすみてらのいらかあさにけにをちかたびとのかすみとやみむ

③あまぎらすみてらのいらかあさにけにをち
かたびとのかすみとやみむ

④あまぎらす
みてらのいらか
あさにけに
をちかたびとの
かすみとやみむ

⑤あまぎらす　みてら　の　いらか　あさ　に　け　に
をちかた　びと　の　かすみ　と　や　みむ

⑥あまぎらす　みてら　の　いらか　あさ　に　け　に
をちかたびと　の　かすみ　と　や　みむ

⑦あまきらす
みてらのいらか
あさにけに
をちかた
ひとの
かすみとやみむ

第十首

①そそりたついらかの鴟尾のあまつひにかがやく
なべにくにはさ可えむ

②そそりたついらかの鴟尾のあまつひにかがやくなべにくにはさかえむ

③そそりたついらかの鴟尾のあまつひにかが
やくふべにくにはさかえむ

④そそりたつ
いらかの鴟尾の
あまつひに
かがやくなべに
くにはさかえむ

⑤そそりたつ　いらか　の　しび　の　あまつひ　に　かがやく
なべ　に　くに　は　さかえむ

⑥そそり　たつ　いらか　の　しび　の　あまつひ　に
かがやく　なべに　くに　は　さかえむ

⑦そそりたついらかの
しひの
あまつひに
かかやくなへに
くにはさかえむ

①吉野秀雄筆写會津八一歌稿「東大寺大佛讃歌」（昭和十八年二月）
②中央公論（昭和十八年四月号）掲載「東大寺大佛讃歌十首并序」（以下③④「讃歌」と略称）
③松本文庫（新資料）會津八一自筆（ペン書）原稿「讃歌」（昭和十八年三月）
④東大寺「雑華乃薗」第二十五号（昭和十八年五月）掲載「讃歌」
※養徳社（昭和十九年九月）刊、山光集「大佛讃歌」は⑤と同一。省略。
⑤中央公論社（昭和二十六年五月）刊、會津八一全歌集「大佛讃歌」
⑥新潮社（昭和二十八年十月）刊、自註鹿鳴集「大佛讃歌」
⑦求龍堂（昭和四十二年五月）刊、「東大寺大佛讃歌」（詠艸會津八一、添画杉本健吉）

附記

「讃歌十首」の製作年次、初印本出版などを時系列にとり、その字句、語分けなど表記、体裁の改変のあとを比較便宜のため作成した。なお、「十首」の編次には一貫して変更がみられない。

高松大学紀要
第　47　号

平成19年２月25日　印刷
平成19年２月28日　発行

編集発行　高　松　大　学
高　松　短　期　大　学
〒761-0194　高松市春日町960番地
TEL（087）841－3255
FAX（087）841－3064

印　　刷　株式会社　美巧社
高松市多賀町１－８－10
TEL（087）833－5811